

『少女世界』の少女表象

— 主筆沼田笠峰の小説分析から —

はじめに

現在当たり前のように使用される「少女」という「少年」の対義語。「少女」という言葉には、その誕生以来様々な意味が包括されてきた。若い女性を指しているこの言葉は、時代とともに外縁的な抑圧を受けて「記号」化されている。このような少女論がはじめて展開されたのは、本田和子によってであった。本田は、それまで児童文化論の中で軽視されてきた少女文化に光を当て、周辺領域・異文化性として少女文化を論じている。その後、近代日本の「少女」「女学生」に焦点を絞り、以下のように述べている。⁽¹⁾

明治末期、「女学生」は、髪に揺れるリボンや足元に翻る海老茶袴によって、また、陽光にきらめく自転車の銀輪やその軽快なベルの音で、近代都市を代表する「記号」となり、さらには、ようやく近代国家としての安定期を迎えた、「明治」という時代の象徴でもあった。

ここに述べられているように、〈少女〉の源流は、明治まで遡る。また、久米依子が提起している問題にも、メディアの発信者側と受け手側が構築していった「少女」は、「あくまで「記号」としての〈少女〉

である」という同様の論が見られる。⁽²⁾

少女を「記号」化していく外縁的要素には時代、政治、教育、メディアなどが挙げられ、それぞれがまた絡み合っていく。少女雑誌の場合、明治三二年の高等女学校令に端を発す。この法令により女子への教育が注目されはじめ、その媒体として女性誌が興隆、若い読者は徐々に増加していき、明治三五年四月に初の少女雑誌『少女界』（金港堂）が刊行された。つまり、公教育との密接な関わりの下、少女雑誌が発展していったことがうかがえる。けれども、すべての少女雑誌が公教育と寄り添ってきたとはいえないだろう。時代とともに、少女雑誌はその有様を変えてきた。教育を要因とする場合ももちろんあっただろうが、出版社や編集者の意向、売り上げなども関わっていたであろう。いずれにしても、坪井秀人が述べるように、⁽³⁾

〈男性〉が〈少女〉との関係において〈少女／少年〉〈少女／女性〉両方の関係性を包含するという一見すると余りにも単純で形式的なこの見取り図は、家父長制や教育において男性が覇権を握ってきた男性中心主義のシステムとも関係している。

と考えられるだろう。これまで述べてきたように、少女を「記号」化していくにあたり、少女雑誌が果たした役割は大きい。明治三〇年代

から続々と増えた少女雑誌であるが、三大雑誌として挙げられるのは、『少女世界』、『少女の友』（明治四一年二月）昭和三〇年六月 実業之日本社）、『少女倶楽部』（大正一二年一月）昭和三七年一二月 大日本雄弁会講談社）であろう。少女雑誌が初めて誕生したのは、『少女界』であるが、その人気を奪った『少女世界』、その『少女世界』の二年後に創刊し明治・大正・昭和と息長く続いた『少女の友』、そして大正期に最も売り上げの高かった『少女倶楽部』は、少女雑誌における〈少女〉像を読み取る上で非常に重要だと考える。少女雑誌の研究で特徴的なものは、読者である〈少女〉たちがコミュニケーションを交わすことができる「投書欄」の内容や文体から〈少女〉独自の共同体を考察するものが挙げられる。⁽⁴⁾ 掲載作品については、与謝野晶子や川端康成、吉屋信子など二作家の少女小説への分析が見られる。⁽⁵⁾ また、「戦争」「身体」などテーマを絞って考察したものもある。⁽⁶⁾

三大雑誌の中で、『少女世界』だけがこれまでの研究ではあまり注目されてこなかった。これは、『少女世界』の廃刊が戦前だったため、『少女の友』や『少女倶楽部』のように生存している読者が多くなかったこと、創刊から廃刊までの雑誌の所蔵が完備されていないことが要因として考えられるだろう。特に掲載小説についての考察は、先に述べた作家研究やモチーフ研究で取り上げられてはいるものの、雑誌一誌での傾向を探る動きは見られなかった。そんな中、久米が「少女小説」の展開を辿っていく上で、『少女世界』の小説を大々的に取り扱った。押川春浪、尾島菊子、田山花袋、沼田笠峰の作品に焦点を当て、その傾向が同雑誌、ひいては他雑誌でも定着、継承されていく（あるいは衰退していく）様を見事に解明している。そして、明治期の「少

少女小説」について次のように結論づけた。⁽⁷⁾

発生期からの「少女小説」の展開をここで確認すると、教訓物語として出発した少女小説は、家の秩序と少女の無力性を強調する物語を繰り返しながら、やがて田山花袋が言説化した官能的な少女へのまなざしも友愛物語によって摂取し、そこに男性読者も酔うようになって、晴れて文学内部での序列化・配列化がなされたといえる。

この言説を『少女世界』へと還元する。創刊当初は、『少年世界』（明治二八年一月）昭和八年頃 博文館）の「少女小説」や『少女界』の小説を踏襲した形での、規範や抑制の言説を強く響かせる教訓物語が主流であった（押川春浪に代表される少女向け冒険小説も当時は人気だったが、これは後に忘却される物語群として紹介される）。その後、尾島菊子の作品に見られる当時典型であった少女不幸物語を通して少女たちに家の秩序を守るよう促していく。ところが、田山花袋の新体詩では少女の官能美に陶醉し、賛美していく態度が見られるようになる。これは、主筆の沼田笠峰が提唱する〈愛される〉少女の一表現であり、彼自らも友愛物語を通してそれを表していくようになる。

このように、久米によって明治期の『少女世界』の小説における大きな流れは確認することができた。けれども久米は、あくまでも「少女小説」の系譜の中に『少女世界』の小説を位置づけているにすぎず、『少女世界』という媒体を意識して小説を分析してはいない。ここで分析されていない作家の小説を考えたとき久米の述べる展開に回収されない小説が存在するのではないだろうか。それぞれを細かく分析していくことで、『少女世界』の独自性が見えてくる可能性がある。また、

『少女の友』などの追随を受けるとはいえ、『少女世界』が〈少女〉生成の源流である明治期に人気を博していたことは、当時の新聞からも明らかである。にもかかわらず、これまで『少女世界』が看過されてきたことにも問題があると考ええる。そこで本論では、『少女世界』に焦点を当て、その掲載小説から〈少女〉表象を考察することを目的とする。なお、〈少女〉生成の源流を辿るという本稿の目的に沿って、考察対象を明治期に限定する。また、ここで述べる〈少女〉を一般的に定義することは難しいが、掲載小説で主人公として登場する少女たちの年齢から、ここでは六〜一八歳の未婚の女性として考える。

一、書誌と主筆

まず、ここで『少女世界』について整理しておこう。『少女世界』は、明治三十九年九月に博文館から『少年世界』（明治二八年）の姉妹版として刊行された。菊判で本文は約一〇〇ページ、博文館印刷所で印刷され毎月定価一〇銭で発行された。毎年四回定期的に増刊もしている。刊行当初は、巖谷小波を主筆としたが、彼の監督下で新たに海賀変哲が編集を主導している。さらに、翌年からは沼田笠峰へと交代した。『少女世界』について考察するにあたり、この主筆の交代は重要な要素であろう。なぜなら、編集人の考えが作品を、ひいてはその作品に書かれている「少女」を構成していくと考えるからである。

男の出来ることは、また女にも出来ない事はありませんが、只その間に、何時も分を忘れない様―即ち自分は女であること云ふ事を、飽くまでも覚えて居ていただき度いのです。

（巖谷小波「愛の光」1―3 明治三十九年一月）
少女諸君！昔から少女は、世にも愛らしいものとして、詩や歌などにも、しばしば歌はれて居るのであります。（中略）私が思ひますには、少女らしくして居るものこそ、真に愛らしいのである。と。（中略）／＼されば、皆さんは、赤ん坊らしくもなく、また大人らしくもなく、どこまでも少女のやさしい、あどけない、ハキ／＼した心を失はずして、至るところで愛せられるやうにならねばなりませんよ。

（沼田笠峰「少女の世界」3―2 明治四一年二月）
編集人の交代は、「少女らしさ」にも変化を及ぼすことになる。久米は、「小波が他者のための「愛」を説いたのに対し、笠峰は他者から愛される」ことを重視し、そのために「愛らしく」||「少女らしく」振る舞うよう注意したと指摘している。

これらの編集人のもとで発行され続けた『少女世界』は、二十五年の歳月を経て昭和六年一〇月に廃刊する。ここには、大正・昭和期に多くの読者を抱えていた『少女の友』と『少女倶楽部』の存在がある。正確な発行部数こそ把握できないまでも、この二誌は昭和初期には約四〇万部を誇ったこともあった。特に、『少女世界』の二年後に刊行された『少女の友』は、中原淳一の表紙絵や、『花物語』で知られていた吉屋信子の作品で昭和前期に人気を博していく。

『少女世界』は『少女界』に代わって、少女雑誌のいわば黎明期を支えてきた雑誌である。少なくとも『少女の友』や『少女倶楽部』に主座を奪われる以前の明治期では、この雑誌が形成してきた〈少女〉像は重要であろう。本論では、『少女世界』の少女表象を知る足掛かり

として、雑誌を形成するにあたり多大な影響を及ぼしてきたと思われる主筆沼田笠峰に焦点をあて、彼の作品における少女表象を読み取っていく。

沼田笠峰（本名・沼田藤次）は、明治一四年一〇月二〇日、兵庫県神崎郡中寺村に沼田藤九郎の長男として生まれる。神戸聚美学館に学んだ後上京、明治三五年から三九年まで教育學術研究会に所属し教育学及び倫理学を学び、明治三六年に国民英学会に入会、三八年に文学科を卒業した。同文館で『教育學術会』『日本の家庭』の編集にあたったのち、明治三九年博文館にうつって『少女世界』の主筆になった。巖谷小波に文学を学んでおり、同時期の門下生に久留島武彦、西村渚山、押川春浪などがある。明治四〇年頃、『少女世界』で執筆している松井百合子（本名・伊藤ふく）と結婚し、明治四一年長女しげのを授かっている。『少女世界』の誌友会である「たかね婦人会」が結成されたときには、沼田は指導にあたってもいる。大正一〇年からは頌栄高等女学校校長に就任。大正二二年三月には芙美子を養女として迎えた。教育実践者として積極的に活動するが、昭和四年過労から倒れ、昭和十一年一月二九日死去。享年五六歳であった。⁽¹⁾

笠峰は、編集人としてだけではなく、女子教育者として後年活躍している。彼は、校長になる以前から雑誌や本の中で自身の教育論を展開しており、⁽²⁾「現今の高等女学校に於ける実際の有様を垣間見ると、その教へ方についても、生徒の取扱ひ方についても、どうも黙つて傍観して居られないやうなことが随分多く、幾多可憐の少女の心情は、将来取り返しのつかない悲しむべき傷痕を受ける」のではないかと、危惧している。

このような問題意識を出発点とし、当時の少女の実態を明示しながら、それに伴わない教育の状況や教育者について彼は批判している。その中で、『少女世界』の主筆であった笠峰は、少女雑誌を「生徒に影響感化を興へる」ものだと思え、「生徒は読まずには居ないのだから、これを如何に利用すべきか、また如何なるものを選択して読ましむべきか」という問題を提起している。⁽³⁾

少女に多大な影響を与える読み物としての少女雑誌を編集してきた笠峰は、主筆の座に就いて以来多くの作品を書いてきた。付表で示すように、特に明治四一〜四三年（第三巻〜第五巻）までは、小説を多く執筆している。雑誌というメディアが少女にもたらす影響について言及している笠峰ならば、自身の書いた作品も少女に影響するものとして意識していただろうことは想像に難くない。少女に対する教育的配慮が小説に於いてどのように施されているのか。笠峰はどのような〈少女〉を描いたのだろうか。

二、沼田笠峰作品の分析

笠峰の作品にも、尾島菊子らの小説に見られるような典型的な少女の不幸が描かれている。彼の小説での不幸の代名詞として、第一に死が挙げられる。「特別寄宿生」(3—10 明治四一年七月)、「妹のリボン」(5—1 明治四三年一月)、「はつたび」(6—1 明治四四年一月)などがこれに当たる。第二に貧困、第三に病、第四にいじめ、と不幸の要素がない小説のほうが稀である。その最たる例として、「乳屋の少女」(4—9、11—13 明治四二年七月—一〇月)が挙げられる。

一四歳の綾子は、最愛の母を亡くし悲しみにくれている。そこに迎えられる第二の母すなわち継母が、綾子につらくあたる。この継母の浪費のために、一家の生活は苦しくなり、田舎へ引越す牛乳搾取場を開くことになった。牛の乳搾りなどの世話をしながら、学校に通うことになった綾子は、「牛の臭いがする」と同級生たちに言われるようになってしまう。それでも懸命に働きながら学校へ通う綾子は、ある日「名誉のメダル」を授与されることになった。そして、その様子が新聞記事になると次のようなことが起こる。

その次の日の朝、綾子がいつもの通り、牛乳の配達をすませて帰りますと、綾子に宛てた一通の手紙が来てみました。差出人は『下谷より』と書いてあるばかり、筆跡にも見覚えがありません。

誰から来たのだらうと、綾子は不思議におもひながら、封を切って読み下しました。(中略)／この不思議な手紙の主は、もしや綾子が半信半疑にしてゐた生みの母様ではないのでせうか。綾子は何と思つてゐることです。

「乳屋の少女」では、このように不幸が何重にも重ねられた後、最後には幸福が待っているかのような印象で終わるが、結末は明らかにされていない。不幸が二重、三重と積み重なっていくことも、オープンエンディングで閉じられることも、笠峰特有といえるものではなく同時代の少女小説ではよくあるパターンの一つである。この小説とは逆に、不幸のまま物語が終結していくことも珍しくはない。笠峰の小説では、兄弟の世話を懸命にした芳枝が結末で病気を発症してしまう「姉」(4・7・8 明治四二年五、六月)のように、報われない(少女)が描かれることもある。いずれにせよ何らかの不幸を小説内に折

り込む手法は、同時代の典型とはいえ、彼の中で一つの約束事となっていたようである。それは、彼の言説からも推測することができる。¹⁴

平凡と単調とは活発なる少年少女の最も苦痛とする所である。心身発育の盛んな時代には、常に何等かの刺戟を求めて止まない。即ち平凡生活を破るための驚愕、単調なる境遇を彩るべき変化、抑制に反抗するための自由、これ等の思想が少年少女を駆つて、遂に家庭を厭ひ学校を呪はしめるやうになるのである。(中略)／もとより善良なる家庭に育つて、普通の教育を受けた少女は、自ら進んで苦界に身を沈めようとは望まなからう。併し、自己の単調な生活に飽き、学校に於ける不断の抑圧に不愉快を感じる時、ふと浮浪本能が小さな胸にさゝやいて、流離、漂泊、空飛ぶ鳥、あてやかな舞姫、振りの袂の美しい姿にあこがれることが無いとも限らぬ。

少女雑誌を読み、女学校教育を受けることができるような読者の多くは、中流階級以上に属していると考えられる。彼女たちにとって、不幸は非日常である。平凡と単調を厭う少女に、作品内で疑似不幸を与えるため、笠峰は不幸を描き続けたのではないだろうか。

また、笠峰は久米が述べるように、少女友愛物語も描いている。後にエスと呼ばれる関係へと発展していく少女たちの友愛は、異性との恋愛の準備段階と捉える見方をされてきた。確かに、エスの関係では一方の少女が異性的な役割を担っているようにも感じられる。けれども、最初期の友愛物語として位置づけられた笠峰の作品においては異なる見方もできるのではないだろうか。

「かくれた心」(5-9 明治四三年七月)では、おとなしく学科

の成績もよい模範生と呼ばれるようなすみ子が、「学校では先生やお友だちの眼を忍んで」、家では「お父様やお母様に気を兼ねながら」悩む姿が描かれている。そんな彼女の苦悩は、ほとんど話したことのないような同級生島子や初子に吐露される。すみ子は、何でも打ち明けられる友だちがないことを「寂しい」と二人に嘆いた。

「寂しい」という言葉は、少女たちの間で交わされる。「さびしい二人」(5—3 明治四三年二月)のように、もともと仲のよかった二人が、事情により別れてしまうことを嘆いて「寂しい」という場合もある。けれども、笠峰の作品では、旧知の仲ではない少女たちが、一方の少女の「寂しい」という感情を吐き出す相手として友愛を結ぶという逆説的な現象が起きている(「春待つ少女」5—5 明治四三年四月)。

このような精神的な関係について、笠峰は「この時代の少女には、学芸を教へるよりも、たゞその感じ易い性情を、のびやかに正しく発展せしめるやうに、真の親しいお友だちとなつてこれを導いてやる」⁽¹⁵⁾ことが教師の役目であると述べている。ここで注目すべきは、少女の親しき友となるべき存在を教師に見出している点である。

笠峰が『少女世界』誌上に小説を多く書き始めたのは明治四一年からであった。その時期に笠峰は「学校小説」という角書きを多く用いている。角書きを作家が付しているか、編集者がつけているかという問題はあがるが、笠峰の場合はどちらの立場も有するため、彼が付したといつてもよいだろう。なお、この角書きは明治期において他の作家の小説にも散見するが、その数は少ない。⁽¹⁶⁾また、一人の作家が「学校小説」という角書きをもつ小説をある時期に複数書いている例は見られない。その名の通り学校が舞台となるこれらの小説と他の小説とで

は何が異なるのであろうか。

「謝恩会」(3—4 明治四一年三月)は、女学校を卒業する日生徒たちが先生方を招き謝恩会を催す様子が描かれている。けれども、この物語で大半を割いて語られているのは「高橋先生」の存在である。

高橋先生は、三〇代の女性教師で「顔色がお白」く、「痩せ」ていて「背が高」い女教師である。この彼女の風貌は、語り手によって「背高く、「慕はしい」と評され、特に、「その眼もとの清しき、口もとのやさしさ、着物の着こなしのお上手なこと、たゞの一度でも先生にお目にかゝつたものは、まるで電気にでも打たれたやうに、すっかり敬服してしまふ」と述べられるほどである。普段の学校生活においても母より頼れる存在であるとして、何事も「包みかくさず」話し、悩みがあれば「一々それを先生に相談する」など、少女たちの人望は厚い。謝恩会の直前まで相談事があると高橋先生を探す少女がいる程である。高橋先生と少女との関係は教師と生徒という一線は画しているものの、少女が自らの心情を吐露することができ、先生がそれに対し熱心に世話を焼くという信頼関係によって成立している。そこには、「親しいお友だち」と同等の関係があると言つてよいだろう。

ところが、笠峰は翌年から「学校小説」という角書きを一切用いなくなる。彼の作品の中で最後に「学校小説」の角書きを冠した「特別寄宿生」を見ると、主人公の秀子が家族の死や貧困、叔母からの虐待による苦学を語る相手は教師である。しかし、そんな状況から彼女を救い出すのは話を聞いた教師ではなく、盗み聞きをしていた同級生たちであった。これまで窮地を救ってきた教師の存在はあくまで話を聞くにとどまっているのである。教師に生徒と「親しいお友だち」とな

ることを望む一方で、笠峰は「女学校の教師は生徒に対して、なぜあんなに冷淡なのだろうか。なぜその形式ばかりに拘泥して居るのだろうか。なぜもつと少女の心理を理解することに努めないのだろうか」という疑問を抱いている。ここから推察すると、読者である少女たちは「冷淡」だといわれる先生に、自らの心情を吐露する機会を持ちえたとは考えにくい。小説内の教師と実在の教師との差異に違和感を覚えるのではないだろうか。このような実情を小説に反映させた結果、笠峰の小説の登場人物が本音を言う相手は、教師から友人（同世代の少女）へと移行していくと考える。

この作品を最後に、以後学校が舞台であつても、笠峰は「学校小説」という角書きを使用しなくなり、当時多くの小説に用いられていた「少女小説」という角書きを用いるようになる。ここで問題となるのは、角書きの変化ではなく、「学校小説」という角書きを彼が使わなくなった直後から、彼の作品の題材に（少女）の友愛が現われてくることである。つまり、笠峰の作品では、教師と生徒との関係の代わりに登場するのが、友愛物語だったのではないだろうか。そう考えると、「特別寄宿生」は、「学校小説」と冠してあるものの、後の友愛物語へシフトしていく過渡期の作品だったのである。教師と生徒という関係はあくまでも「親しいお友だち」の「よう」であるに過ぎず、（少女）が心情を吐露する相手としては物足りない。そこで、教師と生徒に望んだ関係を少女同士に投影させたのではないだろうか。

このように不幸物語や友愛物語という枠組みの中で展開される笠峰の作品は、少女雑誌の作品としては保守的だとみなしてもよいだろう。しかし、笠峰は多くの少女雑誌に次のような批判を加えている。¹⁷²

現代の少年少女雑誌の多くは、（敢て全部とは言はないが）売らん哉の主義で、ひたすら読者の歎心を買ひ、その好奇心、虚栄心を挑発せんと努めてゐる観がある。たゞ一時の浅薄な評判を得んがために、随分非教育的なことを記述するのを恥としないものも、全然ないとは言はれない。

このような痛烈な批判を浴びせておきながら、自身の編集する『少女世界』に非教育的なことを記述している作品を載せるとは考えにくいだろう。まして、自身の作品であればなおさら教育的要素が盛り込まれているとみてよいはずだ。ここで、笠峰の作品内の少女たちに特徴的なこととして挙げられるのが、「勉強の意志」である。彼女たちは、自らが不幸であつても、学校へ行くこと、勉強に励むことを望んでいる。

「先生、私は四年前に、もうお母さんを失くしたのです。それで学校へ上げてもらふことも出来ず、小学校を中途で退がった限り、家の用事や弟や妹の世話をして居りましたが、どうかして、もし勉強したいと思ひまして、閑々に一生懸命に雑誌や書物を読んで居りました。而して、お父さんに一生の願ひだから、どうぞ女学校へ上げてくださいと、さんたく頼んで、ヤツト今年の四月から、この学校へ入学が出来て、ホントに天へも登つたやうに嬉しう御座いましたのに……」（「特別寄宿生」）

全く文子は、半年も一年も前から、女学校の夢ばかり見て居りましたので、（中略）毎日のやうに、楽しい想像を描いて居りました。

（「文子の失望」）

私だつて勤めのひまひまに勉強さへしたら、きつと豫ての望みが

達せられるであらう。この傾いた家運を、私のかよわい力で元のやうにするのは、ちやうどあの燕が巢を作るのと同じこと！……いつかも杉田さんから、あんなに口惜しいことを言はれてゐるんだもの、どうしても今度は師範の試験をうけて、立派に入学しなければ……ほんとにさうだ、燕の巢！

（燕の巢）

「特別寄宿生」の秀子は、母の死のため一度は進学することができなかったが、独学を続け女学校へあがっている。けれどもこの後父も亡くなり、女学校に在学しつづけることが不可能となる。それでも、秀子は校長と話し合う中で、女学校で学習し続けたい旨を打ち明ける。「文子の失望」の文子は、女学校にあがる前から学習することを夢みる少女である。ただし、彼女も父の借金が原因で、結局女学校へ行く夢はかなわない。彼女は学校に行くことを断念してしまうが、家で勉強に励むことを決意する。「燕の巢」の多みこも、先の二人と同様、独学を重ね女学校に進学することを目標としている。このようにどんな状態にあつても、一度は諦めてしまつても、勉学に臨む姿勢を保ちつづけようとする（少女）たちの姿が描かれている。そして、彼女たちにとつて目標となる女学校は、一種の楽園のような形で描かれていることが分かる。

これら『少女世界』に掲載された笠峰の作品の一部は、早い段階で単行本として刊行されている。例えば、『わか草』には「謝恩会」、「秀子」（初出「特別寄宿生」より改題）が、『姉妹』には「まごころ」（初出「姉」より改題）、「妹のリボン」、「心の姉」、「乳屋の少女」が、『少女十二物語』には「寄宿舎の窓」、「初旅」、「燕の巢」がそれぞれ収録された。『少女世界』の誌面で笠峰が自作に言及しているものは管見の

限らないが、単行本が出るたびに自身の本を読むよう推進している。その単行本の「はしがき」で彼は以下のように述べている。

この書に収めた十二篇のお話は、もとより口ざはりのよいのを第一としましたが、それと同時に、滋養分を含ませることに、また十分注意したつもりです。それですから、これを口に入れて、たとひ羊羹のやうに甘くはないにしても、ビスケット位な味はあるだらうと信じて居ります。

（「はしがき」『わか草』明治四三年五月 建文館）

お腹を満たすのに、三度の御飯があります。知識を広くするには教科書があります。併し、三度の御飯に美味しい副食物が欲しいのと同じやうに、教科書の外にも何か心の養ひになるものがないければなりません。／皆様、私はこの書を小説と言ひたくはありません。なぜかと申しますと、この書物の中にあるお話は、文学上でいふ小説とは、やゝ趣を異にしてゐるからです。即ち、皆様の心の滋養分になれかしの考へから、多少の教訓が含ませてあります。

（「はしがき」『姉妹』明治四三年一二月 本郷書院）

少女の読みものについては、不肖ながらも私も、つねに多大の注意を払つて居ります。たゞ読んで面白いといふこと以外に、彼等の清い心に、何等かの意義ある印象を与へたいのが、私の希望なのであります。

（「はしがき」『少女十二物語』明治四四年一二月 誠文館）

ここで注目すべきは、笠峰が自身の作品を「文学上でいふ小説」とは異なるものとしてみていたことである。読んで面白いということも

狙いにはあつただろうが、それよりも重点をおいたことが、「滋養分」を含ませることであつた。つまり、笠峰は小説を書く上で教育的に配慮していたということがここから明らかとなる。さらに、自作を「副食物」や「お菓子」とたとえて述べていることも興味深い。ここで「御飯」にあたるものは教科書である。笠峰は自身の作品を教科書の副読本的に扱い、主要な読み物として自作を読むことを推進していないのである。

三、抑圧された少女

これまで笠峰は、安全で悪意がなく貧困にめげない勉学の意志をもつた〈少女〉を描いてきた。これらは、あくまで笠峰がつくつた美しい理想の〈少女〉のイメージである。けれども、全ての〈少女〉がこのような描かれてきたわけではない。「遅刻」(4—15 明治四二年一月)は、主人公の少女露子が蜆売りの少女を助けたために遅刻してしまうという美談である。ここに登場する蜆売りの少女は、露子が女学校に向かう道中、少年たちにいじめられている。少女が「一番身体の大きな男の子に片腕を握られ、グイと強く」引つ張られ、売り物の蜆を全て駄目にしても、少年たちの行動は続いた。露子が止めるまで、蜆売りの少女は「打たれ、蹴られ、引き摺られ」ていく。

笠峰作品には、前述のとおり不幸な〈少女〉は多く登場し、蜆売りの少女のようにいじめられたり貧困に苦しんだりする。そのいじめは口で罵られる程度にとどまっておろ、「虐待」という過激な言葉が用いられることはあつても、実際に殴る蹴るといった暴行の場面や言

葉が出てくることはない。

けれども、蜆売りの少女は蹴られ、殴られ、引き摺られるという明確な暴力を受けている。これは、彼女が学校にも行けない生活の苦しい下流階級の少女だからであろうか。

他の作品でも下流階級の〈少女〉がいじめられる姿は描かれてきた。ただし、蜆売りの少女とは異なり、彼女たちは勉強に対する熱心さを持つている。それに比べ、蜆売りの少女からは、独学に励もうという意志も女学校に通いたいという願望も見出せない。同じ低所得者層にいる少女であつても、蜆売りの少女が酷い仕打ちを受けるのは、立身出世願望を持ち合わせていないからであろう。

それでは、学業に勤しむ女学生の表象はどうだろうか。「かくれた心」では、先生や同級生から模範生と評され家柄もよく大人しいすみ子が、分かつてもらえない寂しさを偶然居合わせた島子と初子に吐露する。すみ子に寄り添って語られるこの作品は、〈少女〉たちがお互いの寂しさを分かち合うという筋で読むことができるが、島子や初子の視点から見ていくと異なる見方ができる。

島子と初子は、「身なりが貧しいために、いつも除けものにされて居る」少女たちである。すみ子が模範生だと言われることを嘆いているときも、自身は「悪口ばかり言はれて」いるため、「出来るだけ勉強して」すみ子のようになりたいたく口にする。けれども、すみ子はそれを「聞き流し」、自身の話ばかりを展開していく。はじめは「怪訝な顔をし」、すみ子が言っていることの「意味がよく解ら」ず、「何と答へて宜いのか」戸惑っていた二人も、すみ子の言葉を受け入れ彼女の寂しさに納得させられてしまう。そしてあるうことか、高級武官の令嬢

として生まれ成績優秀で友だちからは慕われているすみ子と、生活が苦しく同級生たちから除け者にされている二人の寂しさは同等であると解釈された。

確かにすみ子は模範生ともてはやされることによって、自身の心情を吐露できるような信頼できる友だちを得ることができなかった。友だちがいけないという点で、島子と初子とは共通しているかもしれない。もしそうであるならば、すみ子は二人の話を「聞き流す」必要はなく、むしろその寂しさを享受する必要があったのではないだろうか。互いに「通じ合」うとされながら、島子と初子からすればすみ子の心情を一方的に受容したにすぎない。つまり、二人の心情は黙殺されているのである。

「寄宿舎の窓」(5-8 明治四三年六月)も、「かくれた心」と同様に女学生が描かれている。三か月前に寄宿舎を出たゆり子が、その恋しさから再び寄宿舎を訪れ寄宿舎生活を振り返っていく物語である。寄宿舎生活をしていた頃、ゆり子は「ふさがちの性質」の持ち主で、他の〈少女〉たちとは少し異なっていたことが語られている。「寂しい夜の世界を一人でさまよって見たい」と寂しさに浸る様子、「友達が皆で賑はしう笑ひ興じてゐるのに、自分だけは(略)戸外の景色に見入るのが好き」と孤独を愛す様子が描かれている。

これまで述べてきた笠峰の描く〈少女〉は、女学校を夢見て入学するために勉強に励んできた。それに対し、女学校生活に付随する寄宿舎生活をしているゆり子が抱く感情は「苦痛」であった。彼女は「早く広い世の中へ出て、自由に泣いたり笑ったりして見たい」と望むようになる。ゆり子にとって寄宿舎は自由でない場所だといえよう。そ

して彼女は、とうとう学校を辞め寄宿舎を出て親元へと帰ることになった。親元に帰ってからのゆり子は「身も心もひろく」として、見るほどのもの聞くほどのものが楽しく、文字どおり自由な生活を送っていた。

けれども、たったの数週間で彼女は寄宿舎を恋しがるようになる。その結果、彼女は寄宿舎に忍び込み数か月前まで通っていた場所を歩き回る。やがて全てを回り終えた彼女は、「この寄宿舎の廊下立つことが出来ないのかと思ふと、何だか若々しい少女の時代が過ぎ去ってしまったやうな気がしてならない。：ああ私はもう一度：」と寄宿舎を出たことを後悔する。しかも、女学校に属する寄宿舎を退出したことによって、「少女の時代」も失ったと彼女はみなしている。そんな彼女を見た友人たちも、「随分御様子がお変りなすつたわねえ」と彼女に声をかける。ゆり子が寄宿舎を出てからはたったの三か月しか経過していない。仮に誕生日を迎えていたとしてもせいぜい一歳の変化しかない上に、ゆり子の家庭状況に何らの変化はないため、表面上は何も変わっていないように思える。この三か月に起きたゆり子の最大の変化は女学校に通っているか否かだ。女学生でなくなってしまったゆり子は、自身の「少女の時代」が終結していったやうな気になっている。つまりそれは、女学校にいたときこそ自身が少女であったとみなしているということである。同時に女学校を抜けた少女は、まるで少女ではないように考えられている。

ここまで見てきたように、笠峰の理想とする〈少女〉像から捨象される存在は、勉強を志向しない〈少女〉であった。また、いくら女学生であっても女学校を信奉していない〈少女〉は、〈少女〉ではないよ

うな描かれ方をしている。明治三五年の高等女学校令以来、少女は少年と同様勉強する存在であるとみなされ、女学校で良妻賢母教育を受けるような少女を国家は推進していく。笠峰もその動向を賛美し、女子教育に貢献してきた。ただし、彼の場合は生活が苦しく女学校に行くことができないような少女も、独学をすれば問題ないという姿勢を貫いている。ただ、笠峰の理想から捨象された少女たちから考えると、女学校に行っておればよいというわけではなく、ある一定の学力や教養、ふるまいなどが必要であると感ずる。つまり、表象のレベルでは女学校を志望しない〈少女〉や、素行が備わっていない〈少女〉は弾かれるということだ。これは、少女にある程度の教養を求め、それを備える女学生こそ〈少女〉であるというイメージを確固たるものにしていくのである。

おわりに

それでは、誌面からうかがえる実態としての少女はどうだったのだろうか。『少女世界』には創刊当初から、「談話室」という読者の投稿欄が設置されている。少女たちの声は、ここに送られてくる投書から記者たちが厳選し掲載していた。「沼田先生の少女スケッチは、我々の為めになることばかりです、御願ひですから、毎月出して下さい。」(奈良、友村光子)〔5-4 明治四三年三月〕という投稿のように、笠峰の書く記事や小説に感想を出す読者たちは多い。そして、彼女たちは笠峰の描いた〈少女〉イメージを受容し、「沼田先生よ、私も先生と勤勉と誠実だけを、必らず実行致します故、こゝにかたく御ちかひ

しますわ。(下谷仲おち町にて、のはぎ)〔4-3 明治四二年二月〕という投稿のように、迎合している姿も見られる。すなわち、これらの少女像は現実の少女と笠峰の理想が一致した姿だといえる。けれども、そんな少女たちばかりがいたわけではない。

世界の一少女様、おほせの通り大野松子はヒステリーで、いやな人で、而して心の黒い人でせう。大野は生れてから、随分医者に見てもらいましたが、未だヒステリー性と申された事は御ざいません、さすが世界の一少女様だけに、えらいお見立てです事。大野等とは、交際せぬ方がよろしいでせう。御匿名で卑怯ですな。

(京橋区、ヒステリー性の大野松子)

記者様、皆様、世界の一少女とやらずい分いやな人ね、あの親切でおりこうな大野松子嬢を、あしざまに云ふ人、なんてまーいやな人でしよう。御自分がヒステリーで、心の黒い事をあきらかにするのねー。こんな人が居ると、本誌がけがれるわ。

(日本橋の四少女)

世界の一少女様、大野松子様はそれは〜心の黒い方よ、友人を悪くいつてはすみませんが、実はいやな方よ、そしてはい病なのよ、あんな方とは交際なさらぬ方がよい事よ。

(東京にて、二少女)¹⁹⁾

「世界の一少女」というペンネームの投稿者が「大野松子」という少女の悪口を誌面ですったことが発端で、他の少女たちによって悪口の応酬が繰り広げられる。男性が女性に対して使う「ヒステリー」という侮蔑の言葉や、結核に対する差別意識をうかがわせる「はい病」という言葉を悪口に用いること自体にも問題はあがるが、笠峰が作品で

描いてきた〈少女〉のような、清く美しい姿は見られないと言えるだろう。笠峰自身もこの投稿に対し、「誌友たるものは、みな清い美しい交はりをしようぢやありませんか。」(3—10 明治四一年七月)と促している。

笠峰のつくってきた理想の〈少女〉は、確かに実態として存在していたかもしれない。ただしそれは少女の側面であり、彼の理想から外れている少女もまた実在していたことが分かる。

注

- (1) 本田和子『女学生の系譜 彩色される明治』(一九九〇年七月 青弓社)
 (2) 久米依子「構成される「少女」—明治期「少女小説」のジャンル形成—」(二〇〇三年五月 『日本近代文学』六八)
 (3) 坪井秀人『感覚の近代』(二〇〇六年二月 名古屋大学出版会)
 (4) 今田絵里香「少女雑誌における「少女ネットワーク」の成立と解体—一九三一—一九四五年の少女雑誌投稿欄分析を中心に—」(二〇〇二年五月 『教育社会学研究』七〇) など。
 (5) 古澤夕起子「明治期の少女雑誌と与謝野晶子・『少女世界』と「少女の友」を中心に」(二〇〇二年七月 『梅花児童文学』一〇)、三浦卓『少女の友』のコミュニティと川端康成「美しい旅」——〈障害者〉から〈満州〉へ」(二〇〇九年五月 『日本近代文学』八〇)、福田委千代「吉屋信子『紅雀』・二人のヒロイン——「少女の友」の少女小説」(二〇〇七年三月 学苑) など。
 (6) 長谷川潮『少女たちへのプロパガンダー』『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(二〇一二年一月 梨の木舎)、小出治都子「戦中期における少女

の化粧—『少女の友』からの一考察」(二〇一二年三月 『生存学研究センター報告』一七) など。

(7) 久米依子『少女小説』の生成 ジェンダーポリテイクスの世紀』(二〇一三年六月 青弓社)

(8) 「女学生は何を読む」(『東京朝日新聞』朝刊・一九一〇年九月)、「現代の女学生(11)」(『東京朝日新聞』朝刊・一九一一年四月)、「現代の女学生(14)」(『東京朝日新聞』朝刊・一九一二年四月一七日) 参照。

(9) 注7に同じ

(10) 注7に同じ

(11) 『大正人名事典II』(平成元年二月 日本図書センター 底本:猪野三郎編 『大衆人事録 昭和三年版』昭和二年一〇月 帝国秘密探偵社) 参照。

(12) 『現代少女とその教育』(大正五年一〇月一五日 同文館 『近代日本女子教育文献集15 現代少女とその教育』昭和五九年七月 日本図書センター参照)

(13) 注12に同じ

(14) 注12に同じ

(15) 第四卷第一〇号(明治四二年七月)において、ゆり子「茂子の交際」とみね子「帰省の日」には「学校小説」という角書きが付されている。

(16) 注12に同じ

(17) 「就いては、今度また新春の読みものとして、少女小説の『姉妹』といふ一巻を出しましたから、皆さまに御一読を願ひたいと思つて居ります。」

(「手帳の中より」6—1 明治四四年一月)のように、自らの既刊、新刊を誌面で紹介している。

(18) 三つの引用は「談話室」(3—10 明治四一年七月)に拠る。

(しおや ちさと、広島大学大学院博士課程前期在学)

『少女世界』の少女表象

付表 『少女世界』（第1巻～第7巻）沼田笠峰作品目録

巻号	発行年月日	増刊号名	掲載記事	署名
2巻5号	1907(明治40年)4月1日		◆「伊勢大輔」	沼田笠峰
7号	1907(明治40年)5月1日		◆「ジャンヌダーク」	沼田笠峰
8号	1907(明治40年)6月1日		◆「ジャンヌダーク」	沼田笠峰
15号	1907(明治40年)11月1日		「昔の留学生」	沼田笠峰
3巻1号	1908(明治41年)1月1日		◆「松の内日記」	沼田笠峰
3号	1908(明治41年)2月1日		◆「藤原氏の栄華」	沼田笠峰
4号	1908(明治41年)3月1日		◆(学校小説)「謝恩会」	沼田笠峰
7号	1908(明治41年)5月1日		◆(学校小説)「義侠心」	沼田笠峰
8号	1908(明治41年)6月1日		◆(少女訓話)「同情」 「東北巡回講和会」	沼田笠峰 沼田笠峰
10号	1908(明治41年)7月1日		◆(学校小説)「特別寄宿生」	沼田笠峰
13号	1908(明治41年)10月1日		◆(学校小説)「泣き声」	沼田笠峰
16号	1908(明治41年)12月1日		「仙台の少女会」 「東京第三の女学校の運動会」	沼田笠峰 笠峰
4巻1号	1909(明治42年)1月1日		◆(少女小説)「心の姉」	沼田笠峰
2号	1909(明治42年)1月15日	松の巻	◆(少女小説)「肖像画」	T. N
3号	1909(明治42年)2月1日		◆(少女小説)「お嫁入り」	沼田笠峰
5号	1909(明治42年)4月1日		◆(少女小説)「文子の失望」	沼田笠峰
6号	1909(明治42年)4月15日	さくらの巻	◆(少女小説)「帰郷」	T. N
7号	1909(明治42年)5月1日		◆(少女小説)「姉」	沼田笠峰
8号	1909(明治42年)6月1日		◆(少女小説)「姉」 「さつき閣」	沼田笠峰 沼田笠峰
9号	1909(明治42年)7月1日		◆「乳屋の少女」	沼田笠峰
10号	1909(明治42年)7月15日	白ゆりの巻	◆(少女小説)「寂しき窓」	T. N
11号	1909(明治42年)8月1日		◆「乳屋の少女」 「須磨の浦」	沼田笠峰 笠峰
12号	1909(明治42年)9月1日		◆「乳屋の少女」 「信濃再遊記」	沼田笠峰 沼田笠峰
13号	1909(明治42年)10月1日		◆「乳屋の少女」	沼田笠峰
14号	1909(明治42年)10月15日	もみじの巻	◆(少女小説)「お人形」	T. N
15号	1909(明治42年)11月1日		◆(少女小説)「遅刻」	沼田笠峰
16号	1909(明治42年)12月1日		「東京府立女学校の運動会」	沼田笠峰
5巻1号	1910(明治43年)1月1日		◆「妹のリボン」	沼田笠峰
2号	1910(明治43年)1月15日	雪の巻	◆(少女小説)「姉の涙」	T. N
3号	1910(明治43年)2月1日		◆「さびしい二人」	沼田笠峰
4号	1910(明治43年)3月1日		(近畿地方巡回講話)「少女会の記」	沼田笠峰
5号	1910(明治43年)4月1日		◆「春待つ少女」	沼田笠峰
6号	1910(明治43年)4月15日	花の巻	◆(少女小説)「お店番」	T. N
7号	1910(明治43年)5月1日		◆(少女小説)「燕の巣」 「伊勢の少女会」	沼田笠峰 沼田笠峰
8号	1910(明治43年)6月1日		◆「寄宿舎の窓」 「女学校雑感」	沼田笠峰 沼田笠峰
9号	1910(明治43年)7月1日		◆「かくれた心」	沼田笠峰
10号	1910(明治43年)7月15日	青葉の巻	「少女雑感」 ◆(少女小説)「天人菊」	沼田笠峰 T. N
12号	1910(明治43年)9月1日		「水の国より」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
13号	1910(明治43年)10月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
14号	1910(明治43年)10月15日	月の巻	「少女雑感」	沼田笠峰

15号	1910 (明治43年) 11月1日		「第一高女記念会」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
16号	1910 (明治43年) 12月1日		(四国阪神)「講話会の記」	沼田笠峰
6巻1号	1911 (明治44年) 1月1日		◆「はつたび」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
2号	1911 (明治44年) 1月15日	寒紅梅	「少女雑感十題」	沼田笠峰
3号	1911 (明治44年) 2月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
4号	1911 (明治44年) 3月1日		「大会雑観」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
5号	1911 (明治44年) 4月1日		「神戸と奈良」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
6号	1911 (明治44年) 4月10日	さくら草	「少女雑感」 ◆「離れた心」	沼田笠峰 T. N
7号	1911 (明治44年) 5月1日		「新入学の日」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
8号	1911 (明治44年) 6月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
9号	1911 (明治44年) 7月1日		(東北地方)「少女講話会」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
10号	1911 (明治44年) 7月15日	夏木立	「少女雑感」 ◆「水彩画」	沼田笠峰 T. N
11号	1911 (明治44年) 8月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
12号	1911 (明治44年) 9月1日	五周年記念号	「満五ヶ年」 「赤城湖畔より」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰 沼田笠峰
13号	1911 (明治44年) 10月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
16号	1911 (明治44年) 12月1日		「講話旅行記」	沼田笠峰
7巻1号	1912 (明治45年) 1月1日		◆「春代さん」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
2号	1912 (明治45年) 1月15日	希望の春	「希望の少女十題」 ◆「心の姉妹」	沼田笠峰 T. N
3号	1912 (明治45年) 2月1日		◆「梅咲く頃」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
4号	1912 (明治45年) 3月1日		◆(少女訓話)「わが家」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
5号	1912 (明治45年) 4月1日		「□業生と一年□」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
6号	1912 (明治45年) 4月15日	學校時代	「をとめ草」	沼田笠峰
7号	1912 (明治45年) 5月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
8号	1912 (明治45年) 6月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
9号	1912 (明治45年) 7月1日		(山陽地方)「少女講話会」 「手帳の中より」	沼田笠峰 沼田笠峰
10号	1912 (明治45年) 7月15日	星まつり	「新少女雑感」	沼田笠峰
11号	1912 (明治45年) 8月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
12号	1912 (大正元年) 9月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
14号	1912 (大正元年) 10月15日	少女文話	「新少女雑感」	沼田笠峰
15号	1912 (大正元年) 11月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰
16号	1912 (大正元年) 12月1日		「手帳の中より」	沼田笠峰

※大阪府立国際児童文学館所蔵の『少女世界』の複写から作成。

※旧漢字は全て新漢字に改めた。

※◆は創作を表わす。